

日本人英語学習者の語用論的能力の発達過程

— 横断的研究からの発達過程構築の試み —¹⁾

田頭 憲二

広島大学外国語教育研究センター

大和 知史

明石工業高等専門学校

近年多くの研究が、日本人英語学習者による語用論的能力の特徴を記述するための枠組みを構築してきた。しかし、それらの多くは、学習者の一時的な特徴の記述に留まる横断的研究であり、彼・彼女らの語用論的能力の発達過程を捉えたものではない、という批判を受けている。そうした中、長期的に学習者を捉える縦断的研究の必要性が叫ばれている。

本論においては、語用論的能力に関する研究を横断的研究から縦断的研究への振り子として二分法的に捉えるのではなく、これまでの横断的研究を集積することによって仮説的な縦断的研究と捉えることとする。そして、現在までの横断的研究結果から得られた日本人英語学習者の語用論的能力の発達過程に対する妥当性を、既存の縦断的研究の結果と比較することで検証し、今後の日本人英語学習者の語用論的能力の発達過程解明への一歩とした。

1. 目的

現在まで、日本人英語学習者の語用論的能力・知識を調査するために多くの研究がなされてきた。本論では、そうした研究の中でも最も多くなされている「依頼」方略に着目し、日本人英語学習者の語用論的能力の生産面を対象とした先行研究を概観する。そして、これまでに明らかとなっている日本人英語学習者の語用論的能力の特徴から、仮説的発達過程を提案することを目的とする。

2. 中間言語語用論研究の現状と問題点

2.1 中間言語語用論研究の現状

現在まで、中間言語語用論 (Interlanguage Pragmatics; 以下 ILP とする) 研究において、日本人英語学習者の語用論的能力、知識の特徴を明らかにしようと努力がなされている。

その結果、現在までに、日本人英語学習者の語用論的能力の特徴 (青木, 1987a, 1987b, 1988; Carrel & Konneker, 1981; Kitao, 1990; Tanaka & Kawade, 1982), 語用論的転移の傾向 (Takahashi, 1996; Takahashi & Beebe, 1987), 文脈的要因 (社会的距離, 心理的距離, 依頼の度合い等) の与える影響 (Fukuya, 1997; Kawamura & Sato, 1996; Matsuura, 1998; Tanaka, 1988; Uenaka, 1999), 語用論的能力の教授効果 (Fordyce & Fukazawa, 2004) などの領域が研究され、それぞれ明らかにされている。

2.2 中間言語語用論研究の問題点

しかし、先に挙げた先行研究のほとんどは、焦点を日本人英語学習者の L2 言語使用に当てている。つまり、NS と比較して英語学習者がどのような言語形式を産出するのか、または、使用

するのかという言語使用の側面に焦点が当てられている。一方、どのように英語学習者がその語用論的能力を身につけてゆくのか、というL2語用論的能力の発達過程に関しては明らかになっていない(Kasper, 1996; Kasper & Rose, 1999; Kasper & Schmidt, 1996; Schmidt, 1993)。近年になり、語用論的能力の発達過程を解明する必要性が主張され始めているが(Kasper, 1992; Rose, 2000; Churchill, 2001)、未だ十分と言えるまでには至っていない状況である。

また、これまでの研究が発達過程を十分考慮せずに行われたため研究手法としては横断的(cross-sectional)、一時的(single-moment)研究手法が多く用いられてきた。今後は、先に述べた発達過程を解明するためにも、長期的期間に渡り被験者(あるいは被験者による言語使用)を記録、観察することによる縦断的研究(longitudinal study)が急務とされている。

これらをまとめると、現状のILP研究においては、横断的研究によるL2言語使用が研究されているが、縦断的研究による語用論的能力の発達過程に焦点が当てられていない。では、ここで「縦断的研究をすればいいではないか」と安易に考えてよいのであろうか。

3. 「横断的研究」から「横断的研究の集積」へ

先に述べたように、現在ILP研究分野においては「横断的研究から縦断的研究へ」と振り子が振れている状態である。しかし、最近行われてきている縦断的研究は、無批判に「縦断的研究が必要だから行う」という感覚に陥っているのではないであろうか。同時に、これまで行われてきた横断的研究の結果がないがしろにされてきていないだろうか。例えば、最近の研究の中でも、縦断的研究を謳っているCode and Anderson (2001)は、10ヶ月のホームステイプログラムの実施前後に談話補充課題(Discourse Completion Task: DCT)を課している。しかし、これでは10ヶ月間にL2語用論的能力がどのような発達を示したのかが明らかではなく、期間を空け2度DCT課題の実施を行った横断的研究と捉えることができる。

一方で、縦断的研究をすればそれで事足りるかということと必ずしもそうではないようである。Kasper and Rose (2002)は、'as with most longitudinal research, the database represented here (referring to Achiba, 2002; Ellis, 1992; Schmidt, 1983) is rather small — just four individuals in the case of L2 requests (140–141; 括弧内は筆者による)'と述べており、縦断的研究における被験者数の少なさの問題点が指摘され、横断的研究との相互補完することが求められている。

こうした状況において、語用論的能力の発達過程を明らかにするためには、「多数の被験者を用いている横断的研究」をうまく活用することが重要である。横断的研究を縦断的研究と関連付けることにより、先の研究上の相互補完をなすことができる。つまり、横断的研究を集積することで、縦断的研究をより有意義に行うことができるのではないであろうか。

4. 先行研究の再検討

これまで、中間言語語用論における現状を把握し、その研究における問題点を指摘した。その問題点のひとつとして、横断的研究から縦断的研究への急激な振り子の振れをあげ、両者の相互補完が必要であることを述べた。ここでは、相互補完の方法のひとつとして、「横断的研究の集積による仮説的縦断的研究」を提起する。そのために、本研究においては、次の2つの手順を経る。

- 1) 中間言語語用論的能力の発達過程の構築
- 2) 既存の縦断的研究による発達過程と仮説的「発達過程」との比較

1) では、これまでに行われてきた横断的研究の結果を集積し、被調査者である英語学習者の英語熟達度という軸を基に並べ替え、そこから明らかとなった日本人英語学習者の語用論的能力の特徴を仮の語用論的能力の発達過程として分析した。また、2) では1) の仮の発達過程と、既存の縦断的研究を基に提示されている発達過程 (Kasper & Rose, 2002) との比較を行った。

4.1 再検討の手順

第一の手順として、現在までに行われてきた横断的手法を用いた先行研究を収集した。それらは、日本人英語学習者を被験者としており、依頼方略を対象とした13の先行研究である。依頼方略に焦点を当てたのは、依頼が重要な発話内行為のひとつであり、また、現在中間言語語用論研究において最も多く取り上げられているためである。

4.2 学習歴/熟達度を軸とする横断的研究の集積

先に挙げた先行研究を、以下の表1に示すように、各熟達度レベルごとに上・中・下の3つに便宜的に分類を行った。学習者の熟達度に関して記述のなかったものはその他に分類した。熟達度の分類に際しては、「高校生 < EFL 大学生 < ESL 大学生 < ESL 大学院生」を第一の基準として、「英語熟達度の指標となるテストスコア」を第二の基準として3つに分類した。

表1 調査に用いた先行研究

	熟達度指標	先行研究 (被験者数・調査方法)
下位	高校2年生	Code & Anderson (2001) ($n = 35$, DCT)
中位	EFL 大学生 (TOEFL, 423-527)	Enochs & Yoshitake - Strain (1999) ($n = 25$, VAR)
	EFL 大学生 (18-19歳) (CELT, 122-196)	Sasaki (1998) ($n = 12$, DCT, RP)
	EFL 大学生 なし ²⁾	Fukuya (1997) ($n = 42$, MC) 青木 (1988) ($n = 98$, MC)
	EFL 大学1, 2年生 (Pre-TOEFL, 437-500 / 310-377)	Kawamura & Sato (1996) ($n = 44$, DCT) ($n = 44$, DCT)
	EFL 大学生 (英検2級以上)	Matsuura (1998) ($n = 77$, RS)
上位	ESL 大学院・大学生 (TOEFL, above 550)	Kitao (1990) ($n = 34$, RS)
	ESL 大学院生 (TOEFL, above 550)	Uenaka (1999) ($n = 8$, MC)
	ESL 大学院生 ESL 大学院生	Tanaka (1988) ($n = 4$, RP) Tanaka & Kawade (1982) ($n = 35$, MC)
その他	なし 年少者 (10-12歳)	Schmidt (1983) ($n = 1$, Diary) Ellis (1992) ($n = 2$, RP)

参考: DCT (=Discourse Completion Task), VAR (=Various tasks), RP (=Role Play), MC (=Multiple Choice tasks), RS (=Rating Scale)

用いられている調査方法に違いはあるが、概して、以下の表2のような語用論的能力の特徴がみられた。依頼表現の形式に大きな違いが見られたことから、ここでは「内的修正」に焦点を当てる。

表2 各熟達度別に見られる日本人英語学習者の語用論的特徴

学習者の特徴	
下位学習者	<p>内的修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・直接的依頼表現から徐々に間接的依頼表現へと変化 (Code & Anderson, 2001) ・統語的に時制を変化 (Code & Anderson, 2001) <p>外的修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Hints を使用 (Code & Anderson, 2001) ・Internal Downgraders が複数化 (Code & Anderson, 2001) ・Please の使用 (Code & Anderson, 2001)
中位学習者	<p>内的修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・May I VP? を中立的な方略として頻繁に使用 (青木, 1988; Fukuya, 1997; Matsuura, 1998) ・Could I VP?, Could you VP? の使用が少ない (青木, 1988; Matsuura, 1998) ・Would you VP? を多用する傾向 (青木, 1988) ・Conditional (Could, Would) を Tense よりも多用 (Sasaki, 1998) ・Direct Requests を使用 (Fukuya, 1997; Kawamura & Sato, 1996) <p>外的修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Please を付加する傾向 (Kawamura & Sato, 1996; Sasaki, 1998) ・Grounders を最も多く使用 (Sasaki, 1998) ・Grounders が説得的でない傾向 (Kawamura & Sato, 1996)
上位学習者	<p>内的修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Conventional Indirect を好む (Tanaka, 1988) ・Could I VP? を丁寧な表現として使用 (Uenaka, 1999) ・Can I VP? を頻繁に使用 (Tanaka, 1988) ・May I VP? を中立的な方略として認識 (Kitao, 1990), 避ける傾向 (Uenaka, 1999) ・NS に比べ, Direct Requests を多く使用 (Tanaka, 1988; Tanaka & Kawade, 1982) <p>外的修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Grounders を用いない傾向 (Tanaka, 1988)
その他 (初級学習者)	<p>内的修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Could I/you VP? は表出しない (Ellis, 1992) <p>外的修正</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Please を多用する傾向 (Schmidt, 1983) ・Hints の使用はされない (Ellis, 1992) <p>〔初級学習者の発達過程〕</p> <p>※幼年者の依頼表現は, Lexical Cues, Direct Requests, Conventional Indirect, Internal Downgraders の順に発達 (Ellis, 1992)</p> <p>※成人学習者の場合, 限られた Formulaic Requests から Direct Requests へ移行 (Schmidt, 1983)</p>

下位学習者は、直接的表現、命令文などの直接的方略から疑問文等を用いた間接的表現へと移行している。そして、中位学習者においては、特定の表現‘May I VP?’に固執する傾向が見られた。この表現形式が多く現れることについては日本人英語学習者に特有の現象であると多くの研究が述べている。そして、上位学習者は、様々な表現を状況に応じて使い分けることができるようである。

以上に見られるように、個々の被験者は異なるが、下位学習者から上位学習者への語用論的能

力の特徴を、「仮の発達過程」とみなすことができる。

4.3 既存の発達過程 (Kasper & Rose, 2002) との対比

ここでは、手順1)において作成した「仮の発達過程」を、縦断的研究によって提案されている発達段階 (Kasper & Rose, 2002) と比較検討する。

表3 第2言語による依頼方略の発達の5段階 (Kasper & Rose, 2002:140)

Stage	Characteristics	Example
1: Pre-basic	Highly context-development, no syntax, no relational goals	'Me no blue', 'Sir'
2: Formulaic	Reliance on unanalyzed formulas and imperatives	'Let's play the game' 'Let's eat breakfast' 'Don't look'
3: Unpacking	Formulas incorporated into productive language use, shift to conventional indirectness	'Can you pass the pencil please?' 'Can you do another one for me?'
4: Pragmatic expansion	Addition of new forms to pragmalinguistic repertoire, increased use of mitigation, more complex syntax	'Could I have another chocolate because my children - I have five children' 'Can I see it so I can copy it?'
5: Fine-tuning	Fine-tuning of requestive force to participants, goals, and contexts	'You could put some blu tack down there' 'Is there any more white?'

まず、Kasper and Rose (2002) によるL2による依頼方略の発達の5段階を示す。この5段階の発達過程と先の日本人英語学習者による「仮の発達過程」とを重ね合わせると、日本人英語学習者の下位学習者と Formulaic, Unpacking, 中位学習者と Pragmatic expansion, 上位学習者と Fine tuning の各段階において対応関係があると考えられる。つまり、横断的研究を集積した「仮の発達過程」と、既存の縦断的研究の提起する発達過程との類似が見られる。下位学習者を対象に調査を行った Code and Anderson (2001) によると、下位学習者は、命令文などの直接的依頼表現から間接的依頼表現へと徐々に変化を行っており、Formulaic Stage の特徴である定型表現 (Formulaic) や命令文 (Imperatives) の使用や、次の Unpacking Stage の特徴である定型表現の分析化という段階を経ていることが分かる。また、中位学習者においては、Pragmatic expansion としての 'Would you VP?', 'Could you VP?' 等の新たな間接的表現が表出する (e.g., 青木, 1998; Sasaki, 1998)。上位学習者では、頻繁に使用をしていた 'May I VP?' を中立的な方略として認識を行い (Kitao, 1990)、使用を避ける (Uenaka, 1999) という、Fine-tuning としての発話者、目的、文脈に応じた依頼表現の調整を加えるようになる。

しかしながら、先にも述べた通り、Kasper and Rose (2002) の提起する発達段階は、被験者がごく少なく (Ellis (1992) では被験者は2名, Achiba (2002) においては1名)、また、ESL 環境で実施されたものである。さらには、発達の様相は、それぞれのステージを直線的、一方向

的に進行していくと捉えられている。

本研究において最終的に対象としたいのは、日本人 EFL 学習者における発達過程であり、彼・彼女らが Kasper and Rose (2002) に示されたものと同一の発達過程を経ているのかについては慎重にならなくてはならない。例えば、第一に、集積の際に見られた中位学習者のように、‘May I VP?’ といった表現形式などは学習過程が大きく影響している可能性がある。日本人英語学習者における ‘May I VP’ 形式の使用頻度の多さは、多くの先行研究により指摘がなされている (e.g., 青木, 1988; Fukuya, 1997; Uenaka, 1999; Matsuura, 1998)。そして、そのほとんどの研究において、この日本人英語学習者に見られる ‘May I VP’ 使用は、学習による転移の結果であるとされている。本研究では、多くの大学生 EFL 学習者を対象として行われた研究 (e.g., 青木 1988; Fukuya 1997; Matsuura 1998) が、この ‘May I VP’ 方略の使用頻度の多さを指摘している一方で、より上位学習者であると思われる大学院生 ESL 学習者においては、‘May I VP?’ を中立的な方略として認識しており (Kitao 1990)、その使用を避ける傾向 (Uenaka 1999) が見られ、ESL / EFL 環境の違いが大きく影響を及ぼす可能性を示唆している。

また、この学習による影響は、表 2にあるように、上位・中位学習者ともに直接的方略を未だに用いていることから分かる。直接的方略は、Kasper and Rose (2002) の示す発達段階では、Stage2 (Formulaic Stage) において見られる特徴であるとしているのに対し、日本人英語学習者の場合、中位学習者とされる EFL 大学生の結果だけでなく (e.g., Fukuya, 1997; Kawamura & Sato, 1996)、上位学習者である日本人 ESL 大学院生においても未だに使用されていることが分かる (e.g., Tanaka, 1988; Tanaka & Kawade, 1982)。

ここで、発達過程の表面上の対比だけでは浮かび上がらなかった相違点が考えられる。日本人英語学習者の場合、特に EFL 環境においては、依頼方略において、Kasper and Rose (2002) のように直線的、一方向的に発達するのではなく、各段階を何度も行き来しながら発達していくと考えられる点である。その際に、特に EFL 環境の場合、言語入力の多くを占める教授場面における学習において導かれる転移の影響が大きく作用することが分かった。全体的な言語入力量の少なさにより、それらの日本人英語学習者に特徴的な言語形式に固執し、熟達度が高くなった状態においても Fine-tuning としての調整ができていない。

このことから、今後の研究においては、ESL 環境における発達過程と EFL 環境における学習過程との関係を考察する必要がある。また、この点において、日本人英語学習者に特化した依頼方略の発達過程を設定する必要がある。

5. まとめと今後の課題

本論においては、まず、中間言語語用論における現状を把握した上で、横断的研究と縦断的研究の間に見られる乖離現象を指摘した。そして、両者の相互補完を促すひとつの方策として、現在までの横断的研究を集積し、仮の縦断的研究とすることを提起した。次に、実際に横断的研究の集積として、日本人英語学習者による13の依頼方略研究を取り上げ、それらを被験者の熟達度を軸として日本人英語学習者の語用論的特徴を分析することにより、語用論的能力の「仮の発達過程」を形成した。さらに、その「仮の発達過程」と既存の縦断的研究から提起されている Kasper and Rose (2002) による発達過程との比較を行った。

その結果、一見すると「仮の発達過程」と Kasper and Rose (2002) の発達過程とは、非常に似通った発達段階を示していることが分かった。しかしながら、日本人英語学習者の使用する

方略を詳細に検討すると、彼・彼女らは発達段階を直線的、一方向的に進むのではなく、各段階を何度も行き来しながら発達しており、その段階においては、日本人英語学習者に特徴的な言語形式に未だ固執する傾向がある点が相違点として考えられる。このため、日本人英語学習者独自の発達過程を検討する必要があることが明らかとなった。

今後の課題としては、先行研究の集積結果、そして既存の発達過程との比較より、以下の2点が挙げられる。まず、本研究においては、日本人英語学習者の語用論的能力の生産面を対象とした先行研究を、学習歴、熟達度を軸に概観する試みを行った。これらの先行研究においては、それぞれNSとの比較から日本人英語学習者の語用論的能力の特徴が導き出されるが、一方で、それらの特徴を引き出すために使用されている調査方法が異なる。そのため、今後、調査方法の違いを考慮に入れ、分析する必要性が挙げられる。

そして、今後の日本人英語学習者による中間言語語用論の発達過程を明らかとするために、今回提示した「仮の発達過程」を、より多くの日本人英語学習者を十分に反映したものに改めること、またそれを縦断的研究による補完により十分に検証することがあげられた。また、その際に注意すべきは、学習過程と習得過程を区別すること、ESL/EFL環境の区別をすることである。

今後、日本人英語学習者に対する語用論的能力の教授における、指導項目の選定、指導順序を検討する際の基礎的資料として、さらなる日本人英語学習者独自の語用論的能力の発達過程を解明することが望まれる。

注

- 1) 本稿は、日本教科教育学会第30回全国(山口)大会(2004年10月31日、山口大学)における口頭発表に基づき、内容を加筆、修正したものである。
- 2) 青木(1988)は、データ分析の基とした論文(青木, 1987a, b)を参考に「中位学習者」として分類を行った。

引用文献

- 青木信之(1987a)「依頼表現の丁寧度判断について—発表技能を中心に—」『中国地区英語教育学会研究紀要』17, 33-42.
- 青木信之(1987b)「依頼表現の丁寧度判断について—受容的判断を中心に—」『中国地区英語教育学会研究紀要』17, 163-170.
- 青木信之(1988)「依頼表現の丁寧度判断(ネイティブスピーカー、日本人学習者、日本人英語教師に関して)」『中国地区英語教育学会研究紀要』18, 149-155.
- Carrell, P. L., & Konneker, B. H. (1981). Politeness: Comparing native and nonnative judgments. *Language Learning*, 31, 17-30.
- Churchill, E. (2001). Requests by Japanese learners of English: Where we are and the road ahead. *The Language Teacher*, 25, 9-11.
- Code, S., & Anderson, A. (2001). Requests by young Japanese: A longitudinal study. *The Language Teacher*, 25, 7-11.
- Ellis, R. (1992). Learning to communicate in the classroom: A study of two language learners' requests. *Studies in Second Language Acquisition*, 14, 1-23.
- Enochs, K., & Yoshitake-Strain, S. (1999). Evaluating six measures of EFL learners'

- pragmatic competence. *JALT Journal*, 21, 29-49.
- Fordyce, K., & Fukazawa, S. (2004). The Effect of explicit instruction on the pragmatic development of Japanese EFL learners. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 15, 21-30.
- Fukuya, T. (1997). A study on the inappropriate use of pragmatic knowledge (politeness level in requests) by Japanese learners of English. 『中国地区英語教育学会研究紀要』 27, 1-8.
- Kasper, G. (1992). Pragmatic transfer. *Second Language Research*, 8, 203-231.
- Kasper, G. (1996). Introduction: Interlanguage pragmatics in SLA. *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 145-148.
- Kasper, G., & Rose, K. R. (1999). Pragmatics and SLA. *Annual Review of Applied Linguistics*, 19, 81-104.
- Kasper, G., & Rose, K. R. (2002). *Pragmatic development in a second language*. Malden, MA: Blackwell.
- Kawamura, Y., & Sato, K. (1996). The acquisition of request realization in EFL learners. *JACET Bulletin*, 27, 69-86.
- Kasper, G., & Schmidt, R. (1996). Developmental issues in interlanguage pragmatics. *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 149-169.
- Kitao, K. (1990). A study of Japanese and American perceptions of politeness in requests. *Doshisha Studies in English*, 50, 178-210.
- Matsuura, H. (1998). Japanese learners' perception of politeness in low imposition requests. *JALT Journal*, 20(1), 33-48.
- Rose, K. R. (2000). An exploratory cross-sectional study of interlanguage pragmatic development. *Studies in Second Language Acquisition*, 22, 27-67.
- Sasaki, M. (1998). Investigating EFL students' production of speech acts: A comparison of production questionnaires and role plays. *Journal of Pragmatics*, 30, 457-484.
- Schmidt, R. (1983). Interaction, acculturation and the acquisition of communicative competence. In N. Wolfson, & N. Judd (Eds), *Sociolinguistics and second language acquisition* (pp. 137-174). Rowley, MA: Newbury House.
- Schmidt, R. (1993). Consciousness, learning, and interlanguage pragmatics. In G. Kasper, & S. Blum-Kulka (Eds), *Interlanguage pragmatics* (pp. 21-42). Oxford: Oxford University Press.
- Takahashi, S. (1996). Pragmatic transferability. *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 189-223.
- Takahashi, T., & Beebe, L. M. (1987). The development of pragmatic competence by Japanese learners of English. *JALT Journal*, 8, 131-155.
- Tanaka, N. (1988). Politeness: Some problems for Japanese speakers of English. *JALT Journal*, 9(2), 81-102.
- Tanaka, S., & Kawade, S. (1982). Politeness strategies and second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, 5, 18-33.
- Uenaka, R. (1999). Explorations of the factors affecting politeness in requests according to

American and Japanese students' perspectives. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 10, 11-19.

ABSTRACT

Pragmatic Development of Japanese EFL Learners: What We can See from the Cross-sectional Studies

Kenji TAGASHIRA

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

Kazuhiro YAMATO

Akashi National College of Technology

Numerous studies have strived to describe the characteristics of pragmatic ability including Japanese EFL / ESL learners. Most of them were cross-sectional studies and described only temporal characteristics of learners' pragmatic competence. Since they were not dealing with learner's pragmatic development, longitudinal studies on pragmatic ability have been called for in the field of Interlanguage Pragmatics Research. However, this trend from cross-sectional to longitudinal studies seems to be a swing of the pendulum — in other words, a dichotomous view. Some researchers do cross-sectional studies and others longitudinal. They have not interrelated or complemented with each other.

In this paper, we did not look at these previous studies from the dichotomous viewpoint, but attempted to connect cross-sectional studies with longitudinal studies. First, we reviewed previous cross-sectional studies for Japanese learners and considered them as a hypothetical longitudinal study. From the hypothetical longitudinal study, we established a provisional pragmatic development of Japanese EFL / ESL learners. Secondly, we compared the provisional pragmatic development with the existing pragmatic development (Kasper & Rose, 2002) and showed its validity. Finally, we concluded that the hypothetical pragmatic development proposed in this paper will be a scaffolding to establish the pragmatic development of Japanese learners for further research.